

エルンスト・ラウパッハの戯曲
『ニーベルンゲンの財宝』

石川 栄 作

>>Der Nibelungen-Hort<< von Ernst Raupach

Eisaku ISHIKAWA

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 1340-5632

第9巻 別刷 2002年2月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
The University of Tokushima
Volume IX, February 2002

エルンスト・ラウパッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』

石川 栄 作

>>Der Nibelungen-Hort<< von Ernst Raupach

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

>>Der Nibelungen-Hort<< von Ernst Raupach (1784-1852) wurde 1828 uraufgeführt und erst 1834 gedruckt. Bei der Dramatisierung der Nibelungensage benutzte der Autor als Stoff hauptsächlich das Nibelungenlied. Die Handlungen folgen größtenteils dem mittelalterlichen Epos, aber man findet natürlich hier und dort auch Bearbeitungen. Gerade darin besteht die Charakteristik des Dramas. Sie kann folgendermaßen in 5 Punkten zusammengefasst werden.

Der Dramatiker rückt erstens den Nibelungenhort, der sich im Nibelungenlied versteckt hielt, in den Vordergrund: Siegfried besitzt trotz der Warnung des Zwerges den Schatz und schenkt ihn Chriemhild, was später direkt den Frauenzank und Siegfrieds Mord verursacht. Der Nibelungenhort bringt weiter den Burgunden und den Hunnen eine Katastrophe. Die ganze Tragik beruht auf dem Hort.

Brunhild spielt zweitens in dem Drama eine viel wichtigere Rolle als im Nibelungenlied. Das Heidenweib, das im Epos nur Anlass zum Frauenzank gab, tritt nicht nur beim Mordrat und bei der Jagd auf, sondern ist auch bei Etzels Werbung um Chriemhild anwesend. Als Chriemhild dabei an ihr weibliches Mitgefühl appelliert, verhöhnt Brunhild die Braut als >>Doppelweib<<, wie sie selbst früher geschimpft wurde. So zankt sie sich, ferner beim Kampf erscheinend, fast im ganzen Werk mit Chriemhild.

Das von Brunhild hingeworfene Schimpfwort >>Doppelweib<< führt Chriemhild zum Entschluss, Etzels Gemahlin zu werden: sie will nicht den lieben ersten Gatten rächen, wie im Nibelungenlied, sondern vielmehr der Brunhild die Beleidigung mit Gleichartigem vergelten. Das verwirklicht sich beim Kampf. Als die entwaffnete Brunhild auf beide Knie niederfällt und um das Leben ihres kleinen Sohnes bittet, zwingt Chriemhild die

Gegnerin, zu gestehen, dass er ein Bastard, nämlich ein Kind von Siegfried sei. Die beleidigte Brunhild reißt rasch den Sohn des Königs an sich und stürzt sich mit ihm in den Rhein. So rächt Chriemhild ihre Beleidigung an Brunhild. In den gegenseitigen Beschimpfungen beim Zank der beiden Frauen findet sich die dritte Charakteristik.

Das vierte Merkmal besteht in der Umarbeitung der Etzelgestalt. Der Autor kennzeichnet im Gegensatz zum Nibelungenlied den Hunnenkönig Etzel als blutrünstigen Barbaren und als goldgierigen Heiden. Etzel ist es, der befiehlt, die Herberge der burgundischen Ritter in Brand zu stecken. Ebenso ist es Etzel, der in der letzten Szene befiehlt, Günther und Hagen zu töten. Den wilden Heidenkönig ersticht Chriemhild. Sie wird aber gleichfalls von seinen barbarischen Hunnen niedergehauen.

Im Gegensatz zu den grausamen Hunnen treten Dietrich und Rüdiger als ideale Personen auf: Dietrich sprengt die auf Chriemhild gestürzten Hunnen auseinander und lässt sie die Waffen wegwerfen. Er hält den Tod des barbarischen Heidenkönigs für eine Gottesstrafe, d.h. für die Erlösung der Erde vom finstern Heidentum. Er ist sozusagen Träger der Zukunftshoffnung, so wie Rüdiger, der nunmehr handeln will, damit eine bessere Zeit leuchtend kommen werde. Die fünfte Charakteristik besteht—anders als im Nibelungenlied—in der Andeutung der neuen Zeit.

Ernst Raupach gestaltet auf diese Weise die Fabel des Epos tiefgreifend um und entwickelt damit seine eigene Nibelungenwelt. Das Werk ist literarhistorisch dadurch bedeutsam, dass Friedrich Hebbel eine dieser Aufführungen besuchte. Denn die Aufführung, in der Christine, später seine Frau, die Rolle von Chriemhild spielte, gibt ihm Anlass, sich der Dramatisierung des Nibelungenliedes zuzuwenden. Hebbel vollendet, der letzten Szene von Raupach folgend, bald seine eigene Trilogie >>Die Nibelungen<<.

はじめに

『ニーベルンゲンの歌』の写本が18世紀の半ばに再発見されて以来、ニーベルンゲン伝説はよみがえり、ロマン派詩人たちをはじめ、さまざまな作家たちによって受容されていき、19世紀前半にはニーベルンゲン伝説を素材にした数多くの作品が創り出されていった。その作品数の多さは、たとえば、ジークフリート・グロッセ/ウルズラ・ラウテンベルク共著『中世ドイツ文学の受容』¹⁾における作品目録からも分かるが、当時のニーベルンゲン伝説受容において特

1) Siegfried GROSSE/Ursula RAUTENBERG: Die Rezeption mittelalterlicher deutscher Dichtung. Eine Bibliographie ihrer Übersetzungen und Bearbeitungen seit der Mitte des 18. Jahrhunderts. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1989.

徹的なのは、作家たちは特に戯曲形式を好んでいるということである。まず最初の戯曲作品としてド・ラ・モット・フケーは1808年に『大蛇殺しのジグルト』を出版したところ、予想以上の好評を博したので大急ぎで第二部『ジグルトの復讐』と第三部『アスラウガ』を書き上げて、1810年にこれら三つの作品を『北欧の英雄』三部作としてベルリンのヒッツィヒ社から出版した。また1819年にはフランツ・ルードルフ・ヘルマンも同様に戯曲『ニーベルンゲン』三部作を書き上げ、ライプチヒのF.A.ブロックハウス社から出版した。しかしながら、これらの戯曲作品は実際に舞台上で上演されるまでには至らなかった。劇場で上演された最初のニーベルンゲン戯曲は、F.R.ヘルマンの戯曲出版からおよそ10年後に書き上げられたエルンスト・ラウパッハ（1784-1852）の『ニーベルンゲンの財宝』である。

エルンスト・ラウパッハは、リーグニッツ（現ポーランド）近郊のストラウピッツで生まれ、最初は家庭教師として、のちには教授としてロシアで暮らしていたが、1822年にベルリンへ移住し、それ以降1852年に没するまではとりわけ彼のホーエンシュタウフェン悲劇によってベルリン王宮劇場を支配する存在となった²⁾。彼はまことに驚くほど生産的な劇作家で、全部で117編の戯曲を書いたと言われている。戯曲『ニーベルンゲンの財宝』³⁾はそのうちの一つであり、1828年に初演され、1834年にハンブルクのホフマン/カンペ社より出版された。この戯曲はその後頻繁に上演され、なかでもウィーンのブルク劇場ではハインリヒ・ラウベ監督のもとでよく上演されたようである⁴⁾。確かにこの戯曲は現在ではほとんど上演される機会もなく、人々から忘れ去られているが、しかし、ニーベルンゲン伝説の受容史においてはフリードリヒ・ヘッベルに影響を与えたという意味において貴重な作品であり、ここにそれを取り上げて考察し、紹介するのも意義深いことであろうと確信する。

この戯曲全体は序幕と全五幕から成り、序幕において素材として16世紀の韻文『不死身のザイフリート』や北欧のエッダ・サガが用いられているほかは、主な素材として『ニーベルンゲンの歌』が用いられているが、もちろん改作を

2) Vgl. Norbert MÜLLER: Die Nibelungendichter Hebbel und Wagner. Frohn Verlag Essen 1991. Biographische Notizen zu genannten Personen. S.106.

3) Ernst Raupach: Der Nibelungen-Hort. Hoffmann und Campe Hamburg 1834. 本稿においても本文からの引用はこのテキストに拠り、邦訳は拙訳である。

4) Vgl. Werner HOFFMANN: Das Nibelungenlied. Verlag Moritz Diesterweg Frankfurt am Main 1987. S.114.

施された部分も少なくはない。まさにそれらの改作がラウパッハの戯曲の特質ともなっている。そこで本稿では、作品の展開に従って素材を確認しながら考察することによって、ラウパッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』の特質を探り出すことにしよう。

序幕

まず序幕の冒頭では序曲が鳴り響く間に侏儒^{こびと}のオイゲル王が登場し、背後の高い岩山で一人の若い英雄が恐ろしい竜を退治して、ある国王の娘を救い出したことを語る。序曲が終わるとともに、オイゲルは退き、代わりに若き英雄ジークフリートが気絶した乙女を両腕に抱えて登場することでもってあらずじは展開し始める。ジークフリートは乙女を芝生の上に横たえて、二度にわたって彼女の口にキスすると、彼女はようやく目覚める。目覚めた彼女が語るところによると、彼女はライン河畔ヴォルムスに君臨するブルグント国王ギュンターの妹で、名前はクリームヒルトという。ある夜のこと、彼女は美しい月光に誘われてバルコニーに立っていると、そこへ恐ろしい竜が飛んで来て自分を連れ去り、一年以上にわたってこの岩山で囚われの生活を送らねばならなかった。しかもその竜はやがて男の姿に戻ったときに彼女を妻にしようと目論んでいたため、彼女は月日が経つのを心配していたが、そこへ勇士がやって来て、恐ろしい囚われの生活から救い出されたというのである。

このようなジークフリートの乙女救出の物語は、北欧には伝承されていない、比較的新しいドイツの伝承であり、侏儒オイゲルの登場やクリームヒルトの語る内容から見ても、この場面で作者が素材として16世紀の韻文『不死身のザイフリート』⁵⁾を用いていることは確かである。ただこのラウパッハの戯曲が素材と異なる点は、韻文『不死身のザイフリート』では竜退治の前にクリームヒルトがジークフリートに誠実の愛を約束したのに対して、この戯曲ではジークフリートがクリームヒルトの美しさに魅せられて、救出後ただちに彼女に求婚していることである。そのためクリームヒルトはジークフリートの大胆な求愛にあきれているような感じの言葉さえ口にしてしている。しかし、クリームヒルトが

5) Wolfgang GOLTHNER (Hrsg.): Das Lied vom Hürnen Seyfrid nach der Druckredaktion des 16. Jahrhunderts. Zweite Auflage. Verlag von Max Niemeyer Halle a/S.1911. 石川栄作訳：韻文『不死身のザイフリート』九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第11号1997年

ここで彼の求婚を拒否しているのは、ジークフリートの求愛が性急で大胆であったからではない。クリームヒルトはその理由として「鷹の夢」を引き合いに出して次のように語るのである。

Erzogen hatt' ich einen edlen Falken,
Stark, schön und schlehdornblüthenweiß: ich liebte
Den Falken sehr, und küßt' ihn morgendlich
Und abendlich, und reicht' ihm süße Speise.
Da kamen einst zwei Aare, nächtlich schwarz,
Entführten ihn von meinem Schooß, und würgten
Ihn in den Lüften, und bedeckten mich
Mit meines Lieblings blutigem Gefieder.
Frau Uten, meine Mutter, fragt' ich bangend
Um dieses Traums Bedeutung, und sie sprach:
Der Edelfalk' ist ein erkor'ner Degen,
Der einst Dich lieben wird, und frei'st Du ihn,
So bringt er Dich in Noth und Gram und Thränen
Durch seinen frühen Tod und schnöden Fall.

私は一羽の鷹を飼っていました。
強くて、美しくリンボクの花のように白い鷹で、私は
その鷹をととても愛していました。朝も夜も
その鷹にキスをして、おいしい食べ物を与えていました。
そこへあるとき、夜のように黒い二羽の鷹がやって来て、
私の膝から鷹を連れ去って、空中で
鷹を絞め殺したので、私は愛しい鳥の
血だらけの羽毛で覆われてしまったのです。
私は心配になって母ウーテに
この夢の意味を尋ねたところ、彼女が言うには、
「その気高い鷹は選抜された勇士であり、
彼はいつかあなたを愛し、あなたは彼と結婚するでしょう、
しかし、彼は卑劣な殺害によって早死して、あなたを
苦しみと悲しみと涙の中に陥れるでしょう」というのです。

この「鷹の夢」が『ニーベルンゲンの歌』⁶⁾第1歌章における同様のクリエムヒルトの「鷹の夢」(13-19詩節)を下敷きにしていることは明白であるが、ただこのラウパッハの戯曲ではその「鷹の夢」をクリームヒルトが直接ジークフリートに語っており、しかもジークフリートはその夢占いが真実であることを悟っている。すなわち、ジークフリートは「未来のことは気にせず」に、「今日という日がすばらしいものを差し出してくれているから、それを楽しく受け取ることにしよう」と決意するのである。このような決意をもってジークフリートが改めてクリームヒルトに求婚すると、クリームヒルトは竜の勝者に一生涯仕えることを心の中で誓っていたので、最後にはジークフリートの求婚に応じてしまうのである。

こうして彼女の承諾を得たジークフリートは、さっそくヴォルムスへ向かうことにして、ここまで自分を案内してくれた侏儒のオイゲル王を呼び出す。するとオイゲルは多くの従者を引き連れて姿を現し、一同とともにジークフリートの前にひざまずいて、こう言う。

Preis Dir, o edler Degen, Drachentödter,
Der von dem Joch der Knechtschaft uns befreit!
Wir kommen Dir zu huld'gen, denn wir sind
Jetzt Deine Unterthanen. Dein ist alles,
Was wir besitzen; Dein sind alle Schätze,
Die dieser Felsen weiter Schooß verbirgt.

ほめ称えられよ、気高い勇士よ、竜殺しよ、
奴隷の束縛から我々を解放してくれた人よ！
我々はそなたに敬意を払いにやって来た。というのも、我々は
今やそなたの家来なのだから。我々が所有しているものは、
すべてそなたのものだ。この岩山のふところが隠している
すべての財宝はそなたのものとなったのだ。

ジークフリートの竜退治はこのようにクリームヒルト救出を意味しているのみ

6) Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F.A. Brockhaus
Wiesbaden 1972. 相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』(全2冊)岩波文庫 岩波書
店1955年

ならず、侏儒一族の解放をも意味しており、この点でも韻文『不死身のザイフリート』(153-4詩節)⁷⁾と同じである。ただ素材の韻文ではザイフリートが偶然に自ら財宝を見つけたのに対して、ラウパッハの戯曲では侏儒のオイゲル王が財宝は今やジークフリートのものであることを伝えている。しかも膨大な財宝の中でも最もすばらしい財宝として「霧の頭巾」を説明してオイゲルが言うには、「それを頭に被れば、どんな人間の目にもそなたの姿は見えなくなる」という。これを聞いたジークフリートは、その霧の頭巾をはじめ、宝石も黄金も、すべての財宝をもらい受けようとする。しかし、それに対してオイゲルは「これらの財宝は眠っているときだけ、安全なのです」と言って、その財宝を所有することについては警告する。そうしてから実際にこの財宝がもとで起こった災いの話を語り始めるのである。

侏儒オイゲルが話すところによると、彼ら侏儒一族——ニーベルンゲン族とも呼ばれる——はこの岩山で暮らし、鉱石や宝石から多くの技巧に満ちた製品を作っていたが、それを知った巨人フライトマールがここにやって来て、財宝の主人となり、彼らを下僕にした。彼らは昼も夜もフライトマールにひどく懲らしめられ、彼のために財宝を増やさなければならなかった。ところが、フライトマールは同様に富を熱望する二人の息子——ファフナーとライゲン——によって、寝ているときに殺害された。二人の息子が財宝を分け合うことになったとき、兄ファフナーは財宝を一人占めにしようと思い、邪悪な策略を用いて弟ライゲンを追い出した。ジークフリートが先ほど退治した竜こそ実はその巨人ファフナーだったというのである。このエピソードが北欧の伝承『歌謡エッダ』⁸⁾や『ヴォルスンガ・サガ』⁹⁾に由来するものであることは言うまでもない。ラウパッハはこの序幕において素材として16世紀の韻文『不死身のザイフリート』や中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』のみならず、北欧の伝承をも用いていることが理解されよう。

このような話を聞いたクリームヒルトは、災いに満ちたそれらの財宝を放つ

7) 石川栄作訳：韻文『不死身のザイフリート』九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第11号1997年42頁および石川栄作：『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質 徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)第4巻1993年151-2頁参照。

8) 谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年133-7頁(「レギンの歌」)参照。

9) 菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会1979年40-3頁参照。

ておくことを提案するが、それに対してジークフリートは執拗に財宝への欲望をむき出しにする。韻文『不死身のザイフリート』では主人公にとって「財宝はいつでもよい」(141詩節)のものであり、のちにそれを運び出しても最後にはライン河に沈めた(167詩節)のに対して、この戯曲においてはジークフリートは逆に財宝に執着している。「その財宝の上には死が寝ており、あなたはそれを呼び起こすつもりですか」と警告するクリームヒルトに向かって、ジークフリートはこの岩山に来る前に多くの竜——オイゲルによると、それはファフナーの従者たちだという——と戦ってそれらを焼き殺したことを話して、自分は「その甲羅の溶けた角質を身体に塗りつけて、不死身となった」ので、何も恐れる必要はないという。ただこの不死身の肌に関してラウパッハの戯曲で特徴的なのは、ジークフリートは傷つく箇所が背中に一ヶ所あることを知らないことである。これを彼に教えるのが侏儒オイゲルであり、「そなたの手が届かなかった箇所」が急所だという。しかし、それでもジークフリートは財宝を欲しがり、その理由としてクリームヒルトには「これまで豪華なバルコニーの上で輝いてきたすべての王妃にもまして輝いてほしい」と打ち明けるのである。韻文を素材として成立した18世紀の民衆本『不死身のジークフリート』¹⁰⁾ではクリームヒルトのために財宝を手放したのに対して、ここではクリームヒルトのために財宝を獲得するのである。クリームヒルトもジークフリートのやさしい気持ちに感謝し、こうしてジークフリートは財宝を運ぶためにロバか馬を侏儒オイゲルに要求するのである。

その侏儒オイゲルが立ち去ろうとしたとき、こちらに近づく人たちの声が聞こえてくる。やがてそこに姿を現したのは、ブルグント国のギュンター王と、その家来ハーゲン並びにフォルケール、そして従者たちである。ギュンター王は妹クリームヒルトが竜に連れ去られて以来、何年間も彼女を探してついにここに辿り着いたのである。韻文『不死身のザイフリート』ではザイフリート自らがクリームヒルトをヴォルムスのギュンター王のもとへ送り届けたのに対して、ラウパッハの戯曲では逆にギュンター王が妹を探してこの岩山へやって来るのである。ラウパッハの改作部分であるが、しかしそのあとの展開は『ニーベルンゲンの歌』に基づいている。すなわち、ギュンター王から挨拶を受けた

10) Vgl. Das Volksbuch vom gehörnten Siegfried nach der ältesten Ausgabe (1726). In: Wolfgang GOLTHNER (Hrsg): a.a.O. S.89-91. 石川栄作訳：民衆本『不死身のジークフリート』九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第12号1998年22-4頁参照。

ジークフリートは、彼の妹クリームヒルトを妻にもらい受けたいことを申し出ると、ギュンター王はその条件として次のようにジークフリートに援助を願い出る。

Jetzt, da die Schwester frei ist, will ich thun,
Wozu schon lange mich der Geist getrieben,
Antreten eine Fahrt nach Isenland.
Da sitzt eine reiche Königin,
Brunhild geheißten, eine schöne Maid,
Und hohen Muthes voll: die will ich freien.
Begleite mich: der Weg geht über Meer,
Und Ihr von Niederland, Ihr seydt zumeist
Des Meeres kundig.

妹が自由になった今、私は
長いこと心が駆り立てられてきたことをしようと思う。
イーゼンラントへの旅を試みようと思うのだ。
そこには立派な女王が君臨している。
ブルンヒルトという名前で、美しい乙女であり、
勇気にも満ちあふれている。彼女に求婚したいのだ。
私について来てもらいたい。その道は海を越えており、
ニーデルラントのそなたなら、たいていは
海には通じているはずだから。

この依頼に対してジークフリートは、一緒に随行することを約束する。しかもジークフリートは、『ニーベルンゲンの歌』においてのようにまずは求婚の旅を思いとどまるよう忠告することもない。この戯曲において諫止する役目を果たしているのが侏儒オイゲルである。高慢なブルンヒルトに求婚するためには、槍投げ、石投げおよび弓術という三種競技において勝利を収めなければならないが、オイゲルは「魔法に打ち勝つことのできるのは魔法だけだ」と言って、ギュンター王に勝ち目はないことを告げる。そこでジークフリートは密かにギュンター王に向かって妙案があることを伝えて、ブルンヒルトへの求婚を勧め、ここに二人の間で契約が成立するのである。

こうしてジークフリートはギュンター王の伴をしてこの岩山から直接イーゼ

ンラントへ出かけることになったので、クリームヒルトはひとまずフォルケールの護衛のもとでヴォルムスに帰ることになる。その際、ジークフリートはヴォルムスへ財宝を持ち帰ることができるよう、その準備をオイゲルに命ずる。オイゲルは一人の侏儒に「霧の頭巾」を持って来るように命じ、他の侏儒たちには財宝を箱や袋に詰めて、それらを馬に積むよう命じると、このように人間が喜びをむさぼって、神々のやさしい意志と忠告を台無しにしてしまうことを嘆きながら退場する。

このように見てくると、序幕ではオイゲルが冒頭と最終場面に登場してあらすじを説明したり、その後の悲劇を予告したりして重要な役割を演じていることが理解されよう。ニーベルンゲンの財宝による悲劇がこれから展開し始めることをオイゲルが予告しているのであり、まさにこの序幕はニーベルンゲン財宝に基づく悲劇の幕開けにふさわしいと言ってよいであろう。

第一幕

第一幕はギュンター王の一行がイーゼンラントの海岸に到着した場面でもって始まる。ギュンター王に随行して来たのは、ジークフリートのほかにハーゲン、ダンクヴァルト、オルトヴィーン、そして従者たちである。オルトヴィーンと従者たちを除けば、『ニーベルンゲンの歌』と同じメンバーである。一行が上陸すると、王女ブルンヒルトの使者として主馬頭しゅまのかみが従者を引き連れて城から降りて来る。ギュンター王が名乗ると、一行は主馬頭によってブルンヒルトの城へ案内されることになるが、ジークフリートだけは見張りのため船に残ると言って、その場にとどまる。一緒について行つては、霧の頭巾を用いて三種競技の際にギュンター王に手助けをすることができないからである。一人あとに残ったジークフリートは、懐から霧の頭巾を取り出して、それを被って一行のあとを追って城の中に入って行くのである。

こうしてギュンター王の一行がブルンヒルトの城の広間に案内されると、最初に挨拶に出たのは王妃自身ではなく、多くの婦人に伴われたギリトである。この人物は『ニーベルンゲンの歌』には登場しない、ラウパッハの創作人物であるが、この人物の登場によってブルンヒルトの威厳がより一層強められていると考えてもよいであろう。ギュンター王はまずはこのギリトに対面しなければならないのである。ギリトからこの国へやって来た目的を尋ねられると、ギュンター王はブルンヒルトの求婚を明らかにして次のように答える。

Der Ruf von ihrer Schönheit, ihrer Macht
Und ihrem Heldenmuth ist übers Meer
Zu uns gedrungen, und manch edler König,
Der ihrer sich nicht unwerth achten darf,
Hat zu sich selbst gesagt: o wär' sie mein!
So hab' auch ich gedacht, und ihrem Rufe,
Wie eine Maid dem Ton der Nachtigall,
Nachgehend, bin ich endlich hier gelandet,
Daß ich zu meiner Herrin sie erwürbe.

王妃の美しさと権力と、
さらに勇猛心の噂は、海を越えて
我々のところにも届いている。王妃に想いを
寄せることが許される多くの気高い国王は、
自ら口にしたものだ、「彼女が自分のものであれば！」と。
私もそのように考え、乙女がナイチンゲールの声を
追いかけるように、王妃の名声を追って、
王妃をわが妃にしたいと思って、
ついにここへやって来たのだ。

ギュンター王が求婚の条件として三種競技に打ち勝たねばならず、また王妃の勝利に終わった場合には首を取られることを承知しているのを確認すると、ギリトはただちに一同に向かって決闘の準備をするよう命じる。そのあとギリトにはさらに重要な役割が与えられており、柵で囲った場所で行われる三種競技の経過は、舞台の上では実際に演じられずに、このギリトが一人の婦人との間で交わす会話の中で表現されることになるのである。戯曲化に伴うものであると言ってもよいであろう。

そのギリトがバルコニーの上から競技の経過を眺めながら一人の婦人とともに語るところによると、まず競技は石投げから始まり、次には弓で的を射る技比べ、最後には相手に向かって投げる槍投げと続いたが、いずれの競技においてもギュンター王が勝利を収め、ブルンヒルトは最後の槍投げでは倒れて負傷してしまった。この三種競技においてジークフリートが霧の頭巾を用いてギュンター王の手助けをしたことは、当然のことながらギリトも婦人も、またブルンヒルト自身も知らない。さらにあとの会話からも分かるように、ハーゲンで

さえもが知らないことになっている。

さて、三種競技に敗れたブルンヒルトは、激しく動揺しながら舞台に登場し、婦人たちに命じて武装を解かせる。するとブルンヒルトはまったく白い衣装となり、胸の下には銀のルーネ文字の入った深紅色の帯を締めている。ギリトはそれを見て、胸にルーネ文字の帯が締められている限り、まだ負けてはいないと言って、王妃を励ます。ブルンヒルトもこれによって勇気を取り戻し、ブルグントの国王を呼び出して最後の決着をつけようとする。そのときギュンター王に伴ってついて来たジークフリートを、ブルンヒルトは初めて目にする。そして彼が海岸で船の見張りをしていたこと、およびギュンター王の妹クリームヒルトの求婚者であることを聞き知ると、ブルンヒルトはジークフリートに対してもうそれ以上の関心を抱かない。ブルンヒルトはただちにギュンター王に向かって自分への求婚を思いとどまるように説き伏せ、弱さによって従うほかの女性を探すようにと忠告する。しかし、ギュンター王は当初の目的を断念しようとはしないので、彼女は彼に向かって次のように言う。

・ ・ ・ Doch einen Kampf noch mußt Du kämpfen.
Sobald die Nacht des Himmels Licht verhängt,
Wird auch bereit die Hochzeitkammer seyn.
Nicht aber willig folgen werd' ich Dir,
Mit starkem Arm mußt Du dahin mich tragen,
Mit starkem Arme werd' ich widerstehn,
Und nichts vermagst Du, bis Du diesen Gürtel—
Betracht' ihn wohl, in ihm liegt meine Kraft—
Bist Du den Gürtel mir geraubt; doch kannst Du
Es nicht vollbringen, eh' die Mitternacht
Den jungen Tag gebiert, verfällt Dein Haupt.

・ ・ ・ でもあなたはまだ一つの戦いをしなければなりません。
天の光が夜のとばりに覆われるや否や、
すぐに婚礼の夜の部屋に入ることになりましょう。
しかし、私はあなたについて行くことはしません。
力づくであなたはそこまで私を連れて行かなければなりません。
力づくで私は抵抗するつもりです。
そしたらあなたは何もできません。あなたがこの帯を ——

これをごらん、この中に私の力が込められているのです——
あなたがこの帯を私から奪い取るまでは、でもあなたは
それを成し遂げることはできません。真夜中が過ぎて
新しい朝となる前に、あなたの首は落ちるでしょう。

このようにブルンヒルトの帯には魔力が込められているが、しかし、ブルンヒルト自身がそのあとで口にしてるように、その帯が奪われたら、ほかの女性よりも強いということはありません。そのときは自分の運命も尽きて、王冠と財宝もろともギュンター王のものとなりましようかと伝えて、ブルンヒルトは急いでその場から立ち去るのである。

ブルンヒルトの帯に秘められた魔力を聞き知ったギュンター王は、彼女から帯を奪い取ることのできる者はジークフリート以外にはいないことを悟り、さっそくまたもやジークフリートに援助を願い出る。ジークフリートは懐から霧の頭巾を取り出して再度手助けすることを誓うが、その場面で『ニーベルンゲンの歌』と異なる点は、ハーゲンがそのような秘策を用いることを嫌っていることである。ハーゲンによれば、「ブルグントの将来の国王の母となる女性の身体に彼が触ることは、無作法なことであり、重い罪のようにも思われる」というのである。しかもこのような秘策がいつの日かブルンヒルトに漏れでもしたら一大事だと言って、ハーゲンはこの策略に反対する。「彼が沈黙を誓ったことは、お前も聞いたはずだ」と言うギュンターに向かって、ハーゲンは「風や海の凧と同じように人間の誓いをあてにしてはいけない」と言って、再度ギュンター王に諫言するが、ギュンター王は依然として自らの意志を変えるつもりはない。国王の堅い意志を聞いてハーゲンは、ギュンター王の選択に任せることにした。ただハーゲンは最後には、その国王の選択が災いに通ずるときは誠実に国王の味方であることを誓っており、誠実な家来であるという点では『ニーベルンゲンの歌』と何ら変わるところはない。そしてこの最終場面でジークフリートがギュンター王に約束した手助けは、実際には舞台の上では演じられずに、続く第二幕の展開ではすでにジークフリートが霧の頭巾を用いてブルンヒルトから帯を奪い取ったことが前提となっている。戯曲化に伴う省略である。

第二幕

第二幕ではギュンター王とブルンヒルトの結婚とともにジークフリートとクリムヒルトの結婚も実現してからおよそ一年が経過し、それぞれの夫婦には

すでに一人の息子が生まれていることになっている。ヴォルムスの城では騎士たちの競技が行われているが、突然怒ってブルンヒルトがバルコニーの見物席を中座して退いたところから第二幕のあらすじが展開し始める。王妃のあとを追って来たギュンターが理由を尋ねると、騎士たちのうちで王妃の側について戦っている者は百人もいないのに、三百人もの騎士がクリームヒルト側について戦っているからであると言う。それに対してギュンター王は「妹はニーベルンゲンの財宝、つまり、ジークフリートの後朝の贈り物を施し与えており、その財宝はどんなに浪費しても使い尽くすことはないから、それも当然のことだ」と説明するが、まさにそのことがブルンヒルトには気に入らない。「妹がたとえどのように愛と名誉を享受しようとも、お前が王妃だ」とギュンター王が慰めても、ブルンヒルトは次のように嘆くばかりである。

Ein leeres Wort, an Trost und Freude leer.
 Ich heie nur, Chriemhild ist Knigin;
 Sie ehrt das Hofgesind', sie ehrt das Volk,
 Und alles drngt sich zu ihrem Dienst
 Und achtet es gering, da ich es bin,
 Die seinen knft'gen Knig schon geboren.
 Zu Deiner Schwester Diensten drngt sich alles:
 Denn geben kann sie dreimal mehr als ich;
 Sie ist von heim'schem Stamm, und ich bin fremd;
 Ihr Angesicht ist schner als das meine.

慰めにも喜びにもならない、虚ろな言葉です。
 私は王妃と呼ばれているだけで、クリームヒルトが王妃です。
 従者たちは彼女を敬い、民衆も彼女を敬っています。
 そして皆が彼女のもとに集まって彼女に仕え、
 将来の国王となる子を産んだのは
 私だということには、少しも気づいていません。
 あなたの妹のところに皆が集まり奉仕するのです。
 彼女は私の三倍も施しをすることができるのですから。
 彼女はこの土地の出身であり、私はよそ者です。
 彼女の容貌は私のそれよりもずっと美しいのです。

このような嘆きを取り除くためには「どうしたらよいのか」と尋ねるギュンター王に向かって、ブルンヒルトはジークフリートをこの国から追い出して、故国へ帰らせることを要求する。そのときその場に姿を現したハーゲンもそれを強く要求したので、ギュンター王は困ってしまう。ギュンター王にしてみれば、自分のために誠実に尽くしてくれたジークフリートに向かって「出て行け！」などとは決して言えないのである。ギュンター王はこのように要求を拒否する態度を取るので、ブルンヒルトは「それでも私を愛しているのですか」と怒りを示しながら、急いで右側に立ち去って行く。

一人あとに残ったハーゲンは、再度ジークフリートを遠ざけるよう忠告する。ハーゲンによれば、「夫人たちが憎み合っているところでは、夫たちの友情も存在することはありえないし、何よりも彼の胸の中には秘密が隠されている」からである。「これまで守ってきたことを彼は今後は守れないのか」と尋ねるギュンター王に向かって、ハーゲンは「それをあてにしてはいけません」と警告し、それから二人は右側に立ち去って行く。

このあと左側から登場して来るのがクリームヒルトであり、彼女は帯を手に持ち、かなり動揺している様子である。彼女は戸棚の中で飾りを探していると、奥の方に帯が保管されているのを見つけ、その帯がどういうものであるのかを夫ジークフリートに問い質さなくてはならないと思っているのである。ちょうどそこへジークフリートが現れたので、彼女はその帯の由来を尋ねる。ジークフリートは「ニーベルンゲンの財宝の一つだろう」と答えるが、止め金が曲がっていることや縁飾りが壊れていることなどから、クリームヒルトは「これを帯びていた女性から力づくで奪い取ったものである」ことを確信し、その帯の持ち主に嫉妬の念を抱いている。ジークフリートに不信感を抱き、執拗に嫉妬を強めるクリームヒルトは、『ニーベルンゲンの歌』には見出されない、これまでの伝承とは異なった新しいクリームヒルト像であると言えよう。彼女は夫に向かって「あなたのために子供を産んだので、私の身体の花はしぼんでしまったのだわ」などと言ってしきりに嘆くので、ジークフリートは絶対に口外しないことを条件について秘密を打ち明けてしまう。クリームヒルトはこの打ち明け話を聞いている間中も、その帯の所有者に嫉妬を覚えており、ジークフリートに「恥ずかしく思いなさい」と戒められるほどである。それでもその帯が夫のもとにあっては嫉妬を覚えるからであろうか、クリームヒルトはその帯を自分に与えてくれるようにと頼む。こうしてジークフリートは再度秘密を守ることを条件にして、帯を彼女に贈るが、これが『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように悲劇をさらに大きくすることになるのである。

その悲劇の発端となる両王妃の口論は、ヴォルムスの広場の背景にある大寺院の入口で展開される。ミサの鐘が鳴っている間に集まった貴族と民衆が二列の行列を作って整列している中を、右側からはブルンヒルトが、左側からはクリームヒルトが、それぞれ婦人たちに伴われて大寺院の入口に向かっている。クリームヒルトが少しばかり先に進み、先に大寺院に着こうとしていると、ブルンヒルトが彼女に止まるよう命じ、「最初に大寺院の広間に入ってはいけません」と主張する。これに対してクリームヒルトは「あなたが先に入って行けるよう、大寺院の門の前で私はあなたを待っていたのよ」と言って、その理由としてブルンヒルトの方が年上であることを口にすれば、ブルンヒルトは「年上の人にはではなく、気高い人に譲歩すべきです」と言って、自分は女王であることを指摘する。そしてブルンヒルトが「より立派な男性の妻の方が同様により立派なのよ」と言ったことから、二人の口論はついに夫自慢にまで発展していく。まずブルンヒルトがジークフリートの怪獣との戦いを軽蔑し、これまでこのうえなく勇敢な勇士たちを打ち倒してきたこの自分をギンター王が打ち破ったことを主張すれば、クリームヒルトは「ジークフリートもそれをするのができたでしょう」と言って応戦する。これに対してブルンヒルトはジークフリートを罵って、「彼は決闘を見る心臓さえ持ち合わせておらず、ビクビクして船を見張りながら海岸にすわっていただけ」であることを指摘する。「臆病な人がどうしてブルンヒルトに打ち勝つことができるのでしょうか」と言うブルンヒルトに対して、クリームヒルトはついに秘密を暴露してしまう。

Und hat es doch — nicht König Günther — er.
 Unsichtbar durch die Nebelkappe stand
 Er hinter meinem Bruder, schwang den Speer
 Und warf den Stein und schoß den Pfeil für ihn.
 Ist er ein Feiger nun, so hat ein Feiger
 Der mächt'gen Heldin Brunhild obgesiegt.

でも彼が打ち勝ったのよ。ギンター王ではないわ。
 霧の頭巾のために姿は見られずに、
 彼は私の兄のうしろに立って、槍を振り投げ、
 石を投げ、そして兄に代わって矢を射たのです。
 彼が臆病者なら、臆病者が
 力強い女勇者ブルンヒルトに打ち勝ったのです。

「恥を知らない嘘つき」と言われたクリームヒルトは、さらに婚礼の部屋でのことを持ち出して「暗い夜に誰があなたに打ち勝ったのですか」と尋ね、ブルンヒルトが国王だと答えると、帯を懐から取り出して、こう言う。

Haha! der König? Sieh doch diesen Gürtel!
Weiß ist der Gürtel, den mein lieber Herr
Von einer Maid gewann bei dunkler Nacht?
Dein ist der Gürtel, Dein, und Siegfrid war es,
Der mit dem Gürtel auch Dich selbst gewann.
Hei! sage nun, wer hat den besten Mann?
Und darf ich, einfach Weib, mich unterstehen
Dir, einem Doppelweib, voran zu gehen?

ハハ！国王ですって？この帯をごらん！
私の愛しい夫がある乙女から暗い夜に
奪い取ったこの帯は、誰のものですか？
この帯はあなたのもの、あなたのものよ。そして帯とともに
あなた自身をも勝ち得たのは、ジークフリートだったのよ。
さあ！言って、最もすばらしい夫を持っているのは誰ですか？
そして一人の夫の妻であるこの私は、
二人の夫の妻であるあなたの先を歩いてもよろしいでしょうか？

クリームヒルトはこのようにブルンヒルトを「二人の夫の妻」(Doppelweib)と罵って、彼女よりも先に大寺院の中に入って行くのである。

「二人の夫の妻」と罵られて、このうえない恥辱を被ったブルンヒルトは、やがてその場に姿を現したギュンター王に向かって「あなた方の策略によって私は王冠と自由を失い、臆病で惨めな男の妻になってしまった」ことを訴える。これを聞いたギュンター王は、一緒にその場にやって来たジークフリートに秘密を暴露したことを非難する。するとジークフリートは確かにギュンター王のために手助けしたことは話したが、それ以上のことは言っていないと言い訳をして、従者の一人に命じて妻を呼び寄せる。大寺院から出て来たクリームヒルトは、夫に許しを請いながら言い訳をする。「私はブルンヒルトの恩寵を得たことをそなたに話したか」と尋ねるジークフリートに、クリームヒルトは「あなたはそれを話しませんでした、ただ私はそう思っていたのです」と答える。こ

うしてジークフリートはギュンター王に向かって「嘘はついていない」ことを誓うのである。その間、ブルンヒルトはしきりに復讐を要求していたが、このジークフリートの誓いによってその場の騒ぎはひとまず収まることとなる。

城内の部屋に戻ったブルンヒルトは、しかし、民衆の前で「二人の夫の妻」と罵られたことをギュンター王に訴えずにはいられない。「私の恥辱によって最も深い恥辱が生じたのです」と言って、ブルンヒルトは繰り返しその恥辱の復讐を要求する。「ジークフリートの誓いに満足してもよいか」と尋ねるギュンター王に対して、フォルケールとダルクヴァルトは賛同の態度を示すが、ハーゲンはブルンヒルトとともにジークフリートの死を要求する。ハーゲンによれば、要するに、「名誉の支柱が倒れた場合、その廃墟を結びつける唯一の接着剤は血である」というのである。そしてハーゲンはそのジークフリート殺害の役目は自分が引き受けようと言うのである。ギュンター王はこのハーゲンの提案を最初のうちは拒否していたが、この恥辱は王子の世代になっても続き、王子は家来たちから私生児だと罵られて追放されるだろうというハーゲンの説得に負けて、最後にはそれを黙認したかたちとなるのである。私生児という言葉はハーゲンから聞いたブルンヒルトは、「血でもって王子の汚れを流してください…私は私生児の母にはなりたくありません」と言って、改めてハーゲンにジークフリート殺害を命じる。そこでハーゲンがそれを誓って、いよいよあらずじはジークフリート暗殺へと移っていくのである。

第三幕

第三幕前半の舞台はヴォルムス城内のクリームヒルトの部屋である。ジークフリート暗殺の役目を引き受けたハーゲンは、まず策略としてクリームヒルトを訪れて、かつてジークフリートが捕虜としたザクセン国王がデンマーク国王と同盟を結んで再度ブルグント国に攻め込もうとしていることを彼女に知らせる。『ニーベルングの歌』とほぼ同じ展開であるが、ただこのラウパッハの戯曲ではザクセン・デンマーク勢との戦いは事実のようである。クリームヒルトは、このたびの戦闘がこれまでにない激しい戦いとなるだろうことを聞き知って、敵の戦列の中に突き進む夫ジークフリートのことを心配する。ハーゲンはその夫のことを心配する彼女の心をうまくとらえるのである。「彼は何も恐れはしないでしょう、傷つけられえないのですから」とハーゲンが言えば、クリームヒルトは「そうであったらよいのに」と答えて、夫にも弱点があることをほのめかす。それを受けてハーゲンが巧みに欺いて、尋ねる。

・・・ So ist es wahr, verwundbar
Ist eine Stelle seines Heldenleibes?
Da thät ihm oft der Schuß des Freundes Noth.

・・・ 勇敢な彼の身体の一ヶ所が
傷つけられうるということは、本当ですか？
ならばそこを味方がよく護ってやる必要がありますでしょう。

策略だとも知らずにクリームヒルトは、ハーゲンの言葉を真に受けて、夫の楯となつて護ってくれるように頼む。ハーゲンはさらに「どこが傷つけられうるのかを知っていたら、敵がそこを当てないようにしてあげよう」と言ってから、「しかし、あなた自身それを知らないと思いますが」と付け加える。巧みに夫の急所を聞き出そうとするハーゲンの策略に乗せられて、クリームヒルトはついに夫の急所を打ち明けて、こう言う。

Er hat es mir vertraut. Wo auf dem Rücken
Der Schultern Blätter sich am meisten nähern,
Da ist der Fleck, da lag ein Lindenblatt,
Als er sich salbte mit des Drachen Horn.
O schütz' ihn da, und offenbar' es Keinem!

夫がそれを私に打ち明けました。両肩の
肩甲骨が背中で最も近づくところ、
そこが弱点なのです。夫が竜の角質を塗ったとき、
そこには菩提樹の葉が落ちていたのです。
そこを護ってください。そして誰にも言わないでください！

すべてがハーゲンの策略通りに進み、こうしてジークフリートの急所を聞き出したハーゲンは、彼女にそれを護ってやることを誓いながら、彼女のもとを立ち去るのである。

一方、クリームヒルトはそのあとしばらく考えにふけてから、ハーゲンに夫の急所を打ち明けたことを後悔し始める。不安に思っているところにジークフリートが姿を現すが、クリームヒルトは二度と夫に自らの軽率な行為を打ち明けることはできない。ただ彼女としては自分が見た悪夢を引き合いに出して、

戦いに出かけようとするジークフリートを引き止めようとするだけである。

・・・ Nicht meine Ahnung nur
Auch böse Träume haben mich gewarnt.
Du warst im Thal, zwei Berge stürzten plötzlich
Ob Dir zusammen und begruben Dich.

・・・私の予感だけではなく、
悪夢もまた私に警告したのです。
あなたは谷間にいて、二つの山が突然あなたの上に
崩れかかってきて、あなたを埋めつくしてしまったのです。

このような彼女の不安をジークフリートは軽く受け止めて、からかうばかりなので、クリームヒルトはもう一つの悪夢を引き合いに出して警告する。

O spotte nicht! Ich träumte noch einmal:
Ich sah Dich laufen über eine Heide,
Zwei Eber jagten Dich, und wo Du liefst,
Da wurden Blumen roth: zuletzt verschwandest
Du mir im Nebel und ich weinte sehr.

ああ、からかわないで！私はもう一つの夢を見ました。
私はあなたが野原を駆けているのを見たのですが、
二匹の猪があなたを追いかけ、あなたが駆ける場所では、
花が赤く染まったのです。最後にはあなたは
霧の中に消えてしまい、私はひどく泣いたのです。

このようにクリームヒルトは戦闘に出かけようとする夫をしきりに引き止めようとするが、これらの二つの夢が『ニーベルンゲンの歌』における同様の場面(921-2詩節および924詩節)に由来するものであることは言うまでもない。ただ『ニーベルンゲンの歌』においてはジークフリートは不安に思う妻をやさしく宥めたのに対して、ラウパッハの戯曲ではジークフリートはそれも運命として積極的に受け取ろうとしている。クリームヒルトが気高い鷹の夢で「夫の早死」を告げ知らせたことを思い出させても、ジークフリートは「それが本当だ

としても、私はどうしてそれから逃れられるだろうか」と答えるだけである。クリームヒルトが「私と息子のことを考えてください」と言っても、ジークフリートは「天がそなたたちから私を取り上げるなら、天が私の代わりに別の保護者をつけてくださるだろう」とさえ答えている。それどころかジークフリートは、自分が戻って来ない場合には息子を連れてジークムントの宮廷へ行くようにという指示さえしている。さらにクリームヒルトが繰り返すとどまるよう説得しても、「神がそなたたち二人を護ってくださいますよう！」などと答えるのみである。このようにジークフリートが運命を楽天的に捉えているところにラウパッハにおけるジークフリート像の特質があり、ジークフリートはクリームヒルトとの別れを惜しみながらも、自らの運命に向かって突き進んで行くのである。

第三幕後半の舞台はオーデンの森の中の広い空き地であり、左側には岩の中から泉が湧き出している。ハーゲンはこの場所でジークフリートを暗殺しようとするのである。『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じ設定であるが、ただラウパッハの戯曲ではザクセン・デンマーク勢との戦いの前にこの森で狩りを催しており、しかもこの狩りにはブルンヒルトも同行しているところに特徴がある。ハーゲンはブルンヒルトからその場で改めてジークフリート暗殺を頼まれると、その役目遂行のために一人にしてほしいことを願い出たので、ギュンター王とブルンヒルトの二人はひとまずその場から立ち去る。

こうしてハーゲンが一人その場で待ち受けていると、やがてジークフリートが姿を現す。しかし、そこには狩人たちもいないうえに、料理人も酌人もいなかったのもので、ジークフリートが不平をもらすと、ハーゲンは持参してきたパンを彼に与える。ジークフリートはハーゲンのそばにすわり、それを食べながら、次にワインを所望すると、「ワインは持っていない」という。ジークフリートがまたもや不平をもらすと、ハーゲンはすぐそばに「愛しい神のワインが湧き出している泉がある」ことを教える。その泉のところへ行って、まずハーゲンが武器を置き、泉にかがみ込んで水を飲むと、「とてもおいしい水だ」と言って、ジークフリートにも勧める。ジークフリートは武器を取り外して、泉の水を飲むうとしてひざまずく。するとハーゲンは密かにジークフリートの武器を奪い取って、その剣を引き抜いて、それをジークフリートの両肩の間に突き刺すのである。ジークフリートは飛び上がって、自分の武器を探すが、見つからないので、石をハーゲンに投げつける。しかし、ハーゲンはすでに消え失せていた。背後でハーゲンが角笛を吹くと、ギュンター王とブルンヒルトがフォルカーやダルクヴァルトそしてそのほかの者たちとともに現れる。瀕死の状態にあるジ

ークフリートが一同の仕打ちを呪うと、ブルンヒルトは「帯を盗んだ者よ！ごらん、お前の盗みに対して私もお前に帯を贈ってあげたよ、死という解けない丈夫な帯をね」と言いながら、自らの勝利を宣言する。これに対してジークフリートは、ブルンヒルトのことを「異教徒の邪悪な心の有毒の茸」と表現しながら、災いの財宝である魔法の頭巾さえ持っていなければ、「有毒の茸をキリスト教徒の清らかな家にもたらずことはなかったのに」と後悔したあと、妻子の保護を神に祈りながら、ついに息を引き取るのである。

そのさまをそばで見ていたギュンター王は、ブルグント勢にとって頼みの綱であったジークフリートの死を悼むが、ただちに全軍に出発の準備を命じてから、ハーゲンに向かっては王妃ブルンヒルトをヴォルムスに連れ戻して、国元にとどまって国の管理をしてくれるよう依頼するとともに、さらにはジークフリートの遺体を運んで、彼にふさわしいように埋葬してくれるようにと頼む。ハーゲンとフォルカーのほかは、全員ギュンター王に従って退場する。その場に残ったフォルカーはハーゲンの仕打ちを非難したあとで、エニシダのつるで花冠を作り、それをジークフリートの頭に被せ、英雄をほめ称えながら、その死を悼む。

第四幕

続く第四幕は7ヶ月にも及ぶ戦いからギュンター王がヴォルムスに凱旋し、宮廷の広間でハーゲンとブルンヒルトが出迎える場面でもって始まっている。『ニーベルンゲンの歌』には見出されない、ラウパッハの創作部分である。ギュンター王の留守中にハーゲンはクリームヒルトからニーベルンゲンの財宝を奪い取って、それを一人で24夜もかけてライン河に沈めたのであったが、それを愚か者の行為だと非難するギュンター王に向かって、ハーゲンは「それをしたのは愚か者ではなく、誠実な男です」と言ってから、次のように説明する。

Viel schlimmes hat der Hort uns schon gebracht,
 Des Friedens Kranz, des Blutes heilig Band
 In meines Königs Hause schon zerrissen,
 Und Schlimm'res, fürcht' ich, möcht' er noch gebären.
 D'rum soll des Rheines Fluth ein Grab ihm wühlen,
 Damit er tiefer stets und tiefer sinke,
 Bis er zurückkehrt in den Schooß der Erde,

Aus dem zum Unheil er gerissen ward.

その財宝はすでに我々に多くの災いをもたらし、
王家における平和の冠、
血族の神聖な契りをすでに引き裂いたのです。
そして財宝はさらに災いを生み出すだろうと思うのです。
だから、それが常により深く、より深く沈んでいるように、
ライン河の波に財宝の墓を掘ってもらうべきなのです。
財宝がそこから引き裂かれて災いのもととなった
大地のふところへ財宝が戻って行くまで。

『ニーベルンゲンの歌』においてハゲネが財宝をライン河に沈めたのは、それをのちに利用して権力を増強しようと思ったためであったが、このラウパッハの戯曲では「あらゆる災いのもととなっているニーベルンゲンの財宝を永遠にライン河に葬る」ためであることが明らかである。財宝に執拗に執着する『ニーベルンゲンの歌』のハゲネとは異なった、新しいハーゲン像がここで読み取られることが理解できよう。

これに対してニーベルンゲンの財宝へ強い欲望を示しているのがブルンヒルトである。王妃ブルンヒルトにせがまれてギュンター王も、ハーゲンに財宝のありかを教えるように命ずるが、ハーゲンは断固として「それを誰にも明かさないと主張する。さらにハーゲンはギュンター王の留守中に、ジークフリートの息子を祖父の宮廷に送る一方、クリームヒルトはヴォルムスにとどまらせたのであったが、それも要するに、クリームヒルトが義父のもとで息子とともにブルグント族への復讐を企てないようにとの配慮からである。「夫を奪われ、財宝を奪われて、彼女は何を始めることができようか」と考えるギュンター王に向かって、ハーゲンは「夫人の権力が消え去るのは墓においてのみです」と言って、夫人の力を警戒するよう忠告するのである。

そのあとファン族のエツェル王がヴォルムスにやって来て、クリームヒルトに求婚していることをギュンター王から聞き知ったときも、ハーゲンは当然のことながら断固としてそれに反対する。ハーゲンはギュンター王の前にひざまずいてブルグント王家の存続のために諫止する。しかし、この再婚の件ではハーゲンはギュンター王を説き伏せることができない。ギュンター王は「私はお前の忠誠心の奴隷ではない」と言って、クリームヒルトをエツェル王と結婚させる決意をするのである。

ちょうどそこへクリームヒルトが姿を現し、ギュンター王に自分を祖父のもとにいる息子のところへ行かしてくれよう、許可を願い出る。ギュンター王はもちろんそれを許さない。「陰気な未亡人のヴェールを被って年をとるべきではない」と言って、フン族のエッツェル王との再婚を勧めるのである。異教徒の妻になることをクリームヒルトが拒んだことは、言うまでもない。「それはブルグント王家にとっても恥辱です」と言って、クリームヒルトはギュンター王の前にひざまずいて頼むが、無駄である。クリームヒルトはそのあと同じ女性としてのブルンヒルトにもひざまずいて自らの悩みを分かってくれるように頼む。しかし、これまでクリームヒルトから「異教徒の妻」と罵られてきたブルンヒルトが彼女の苦しみを聞いてやろうとするはずはない。それどころかブルンヒルトはクリームヒルトの苦悩をあざ笑って、次のように言う。

Geh' in des Heidenkönigs schimpflich Bett,
 Daß Dich der Mägde niedrigste verlache;
 Geh'! werd' ein Doppelweib! dann sind wir wett;
 In Deiner Schande schwelgt dann meine Rache.

異教徒国王の恥辱的なベッドの中に入るので、
 ひどく身分の低い侍女があなたのことをあざ笑えるように。
 さあ！二人の夫の妻となるのです！そしたら私たちは対等です。
 あなたの恥辱で私は復讐をたっぷり楽しむことにしましょう。

かつてクリームヒルトから自分に浴びせかけられた「二人の夫の妻」(Doppelweib) という罵り言葉を、今やブルンヒルトはクリームヒルトに向かって言い返すのである。ラウパッハの戯曲で重要なことは、まさにこのブルンヒルトの罵りによってクリームヒルトは、即座に「復讐」を誓ってエッツェル王との再婚を決意していることである。従って、クリームヒルトの復讐は、『ニーベルンゲンの歌』においてのように愛しい夫への復讐というよりは、むしろ自分に加えられた屈辱的な言葉への仕返しと言ってもよいであろう。遠くからトランペットの音が聞こえて、エッツェル王がヴォルムスの城に入ったことを知るや、クリームヒルトは「花婿が後朝の贈り物として復讐をもたらしてくれる」ことを信じて、花嫁として着飾るために自らの部屋へ戻って行く。

場面転換があつて、舞台はクリームヒルトの部屋である。クリームヒルトは自分の部屋に戻ると、侍女ヒルディコに頭に被る飾りを用意するよう言いつけ

るとともに、フン族の国王の花嫁になることを伝える。そうしているうちにギンター王がエッツェル王を案内してクリームヒルトの部屋を訪れる。クリームヒルトはエッツェル王を出迎え、二人きりで話し合うことを望んだので、ギンター王はその場を退く。二人になってから、クリームヒルトはエッツェル王から正式に求婚を受ける。クリームヒルトは即答を避けるが、もちろんエッツェル王から復讐の手助けを得るためである。自分の要求を聞かれたクリームヒルトは、自分に与えられた致命的な苦しみに仕返しをしたいことを伝えると、エッツェル王は即座に次のように答えて約束する。

Ich sage Dir ihn zu, vollwicht'ge Rache
Für Deines edlen Gatten schnöden Mord,
Für Deiner Güter, Deines Kindes Raub.
Für jede Träne, die dem Aug' entrann,
Zahlt Dir ein Blutstrom aus der Feinde Herzen.

私はそなたにそれを約束しよう。そなたの気高い夫の
卑劣な暗殺、そなたの財産や子供を奪い取ったことに
対して心からの復讐をしてあげよう。
目から流れ出たそれぞれの涙に対して
仇敵の心臓から大量の血が流れ出るようにしてあげよう。

『ニーベルンゲンの歌』においてはフン族のエッツェル王はとても温和な人物として描かれていたのに対して、ラウパッハの戯曲ではエッツェル王はまったく粗野な野蛮人として登場していることが明らかである。「目から流れ出た涙に対して心臓からの大量の血の復讐」を誓うこのエッツェル王に向かって、クリームヒルトも復讐の成就の暁には彼の妻になることを約束すると、エッツェル王は「ライン河畔に宿営地を設けて、花嫁にその復讐を見せてあげよう」と言って、その場を去って行く。一人あとに残されたクリームヒルトは、なるほどジークフリート暗殺に対する復讐をも口にしてはいるが、しかしどちらかと言えば、自らに加えられた恥辱に対する復讐の方に重点が置かれていることは、以上見てきたことから、またその後のあらすじの展開からも容易に理解されよう。

第五幕

フン族のエッツェル王はこうしてクリームヒルトとの約束を果たすため、ヴォルムスから少し離れたライン河畔に宿営地を設け、クリームヒルトとの婚礼の宴にブルグント族を招待する。第五幕はその宿営地におけるエッツェル王のテントの中で祝宴が行われているところから始まる。その宴の最中にハーゲンの勧めに応じて楽人フォルカーがリュートに合わせて一つの歌を歌うが、誠実な者が国王に欺きを警告する内容だったので、エッツェル王は動揺してその歌を中止させてしまう。夜も更けていたので、クリームヒルトの言葉によって宴も果て、ブルグント族たちは用意された宿泊所へと立ち去る。あとに残ったクリームヒルトがエッツェル王に対して約束の「後朝の贈り物」を要求すると、エッツェル王はただちに家来たちに武装を命ずる。それに付け加えてクリームヒルトも家来たちに次のように要求する。

Zwingt meinen Bruder, Euch den wilden Hagen,
Den Mörder meines Gatten, auszuliefern.
Doch bringt ihn mir lebendig, daß er erst
Aussage, wo der Schatz verborgen liegt,
Und dann empfangen den verdienten Tod.

私の兄を説得して、私の夫を殺害した
野蛮なハーゲンを引き渡すようにさせるのです。
しかし、財宝の隠し場所を打ち明けるよう、
彼を生きたまま連れて来るのです。
そのあとで彼はそれ相応の死を受け取ればよいのです。

この命令に反対するのがディートリヒである。ディートリヒは『ニーベルンゲンの歌』においてと同様にこの戯曲でも理想化されて登場している。ギュンター王がハーゲンの引き渡しを拒んだ場合には血の戦いを要求するクリームヒルトとエッツェル王に向かって、ディートリヒは彼らが客人であることを主張するのである。しかし、エッツェル王は「祝宴のテント内では客人であった」が、立ち去った今はそうではないと言って、改めて家来たちにブルグント族を攻めるよう命じる。エッツェル王は情け容赦のない人物であることが明らかである。

そのあと場面転換があつて、舞台はブルグント族の宿舎である。ブルンヒル

トの息子はすでに寝所でぐっすり心地よく眠っている。ブルンヒルトがギュンター王に就寝の挨拶を済ませて寝所へ退くと、ハーゲンはギュンター王にこのたびの招待には陰謀がはりめぐらされていることを指摘して、ただちにこの宿舎から逃げ出すよう忠告する。しかし、これに対してギュンター王は「逃亡は国王を傷つけることになるだろう」と言ったりして、すっかりエツェル王を信じ込んでいる。それだけに、やがて慌てて入って来たオルトヴィーンからフン族の攻撃を知らされたときには、ギュンター王の驚きも尋常ではなかった。ギュンター王はただちに勇士らに武装を命じ、フン族の攻撃に立ち向かう決意を下すのである。

続く場面はブルグント族の宿舎の前の広い広場。宿舎は右手にあり、その入口にハーゲンとフォルカーが剣を抜いて現れる。左手からエツェル王が家来とともに現れて、ギュンター王との話し合いを要求する。ハーゲンが呼びに行き、やがて姿を現したギュンター王はエツェル王の要求を尋ねる。エツェル王はニーベルンゲンの財宝とハーゲンの引き渡しを要求するが、ギュンター王は財宝を引き渡す意志はあるものの、自分のために尽くしてきたハーゲンだけは絶対に引き渡せないことを言い渡して、また宿舎に入っていく。要求を拒否されたエツェル王は、まず弟ブレーデルにブルグント族を捕らえてくるよう命ずると、ブレーデルはハーヴァルトとともに従者を引き連れて敵の宿舎に入り込む。建物の中では剣の騒々しい音がし始める。そこへ左手からクリームヒルトが現れて、エツェル王がまだ「後朝の贈り物」を与えてくれないことに不満を募らせていると、宿舎の中からハーヴァルトが逃げ出して来て、報告するところによると、ブレーデルはギュンター王の剣によって打ち殺されたという。弟を打ち倒されたエツェル王は、次にはディートリヒとリュエディガーに命じて、敵を討ち滅ぼすよう指示する。従者とともに敵の宿舎に入っていく二人に向かってクリームヒルトは、「財宝を隠した男と王妃だけは生きてままだ連れて来るのだ」と叫ぶ。宿舎の中からは再び剣の騒音が聞こえてくる。

やがてブルンヒルトが寝間着のまま、左腕には息子をかかえ、右手には剣を持って、追いかけるフン族に対して身を守りながら、宿舎の中から飛び出して来る。しかし、エツェル王の命令によって、彼女は武器を取り上げられたうえ、息子をも引き離される。そのブルンヒルトに向かってクリームヒルトは、数日前に彼女の前に自分が身を投げ出して同情を求めたときに、彼女がハリネズミのように怒りの鋭い刺激を差し向けたことを引き合いに出して、今度はブルンヒルトがひざまずいて命乞いをするがよいと言って、彼女をひどく罵る。罵りはそれだけにとどまらず、ブルンヒルトの息子をライン河の中に投げ込む

よう命ずるエッツェル王に向かって、クリームヒルトはその子供を自分の息子の下僕にしたいので引き渡してほしいと要求する。これに対してエッツェル王は少年を「波の中に投げよ」と命ずる。少年はこの国の後継ぎだから、亡き者となれば、ブルグント国はエッツェル王のものとなると考えたのであるが、そのときクリームヒルトが罵って言うには、

O nein! das nicht. Unecht ist er geboren,
Nicht meines Bruders, meines Gatten Sohn.
Laß sie's gesteh'n, daß er ein Bastard ist;
Wenn sie's gesteht, so laß den Knaben leben.

いえ！そうではありません。彼は偽って生まれたのであり、私の兄の息子ではなく、私の夫の息子なのです。この子供が私生児であることを彼女に白状させなさい。彼女がそれを白状したら、その子供は生かしてあげるのです。

エッツェル王が驚いて「それが本当なら、その子供を生かしてやろう」と言うのを聞いたブルンヒルトは、急いで立ち上がり、息子を引き寄せると、彼を高く持ち上げて、「この子は国王の息子です」と叫び、背後のライン河へ息子とともに身を投げ入れる。それを見たクリームヒルトは「よく眠るがよい！よく眠るがよい！」と繰り返す。このようにクリームヒルトのブルンヒルトに対する復讐は、夫の暗殺への復讐というよりは、ブルンヒルトから受けた恥辱に対する復讐であったことがこの場面からも明らかに読み取られよう。

ブルグント族とフン族の戦いはディートリヒとリューディガーの介入によって最終段階を迎え、やがてギュンター王とハーゲンがその二人によって捕らえられ、両手を縛られて、宿舎の中から連れ出されて来る。ディートリヒの報告によると、宿舎の中にはもはや誰も生きていないようである。エッツェル王はそれを聞くと、死者を焼くために宿舎に火をつけさせる。『ニーベルンゲンの歌』においては客殿に火を放つよう命じるのはクリエムヒルトであったが、その役目はここではエッツェル王に与えられており、エッツェル王は特に粗野な人物として描かれていることが容易に理解されよう。まず最初にギュンター王を連れ去るように家来に命じたのもエッツェル王であり、そのあとクリームヒルトがハーゲンに財宝のありかを尋ねた際に、打ち明けないと国王に誓ったことをハーゲンが繰り返して強調すると、密かにギュンター王の首を刎ねさせたのもエ

ツェル王である。その兄ギュンターの首が運ばれてきたとき、クリームヒルトは激しく驚いてさえている。この残忍なエッツェル王の仕打ちに対してハーゲンも負けてはいない。自分はこの世と同じようにあの世でもギュンター王の家来であることをハーゲンは主張しながら、ギュンター王の死によって「お前の誓いは解かれたぞ」というエッツェル王に対して、次のように答えている。

Die Lösung konnte nur vom König kommen;
Er hat den Eid mit sich ins Grab genommen.

誓いを解くことができるのは国王だけだ。
彼はその誓いを自ら墓へ持って行ってしまったわい。

ラウパッハの戯曲では言葉のやりとりがクリームヒルトとハーゲンの間ではなく、エッツェル王とハーゲンの間で展開されているものの、ハーゲンの反抗精神は『ニーベルンゲンの歌』においてと同様に発揮されている。このような反抗心をもって抵抗するハーゲンをエッツェル王が殺害するよう命じるのであり、その点では『ニーベルンゲンの歌』とは著しく異なっていることが明らかである。

さらに著しい相違を見せているのがこの戯曲の最終場面であろう。ブルグント族とフン族との戦いの末、あたりが一面「死人の畑」と化した中でクリームヒルトは、一人佇みながら複雑な心境である。これまでの自分の行為を振り返り、自責の念にとらわれながらもクリームヒルトは、自らを勇気づけて次のように言う。

Muth, sag' ich, meine Seele, halte fest!
Du brauchst noch Kraft; denn diesen Heidenkönig,
Der freudig seine Hand der Hölle leiht,
Den soll die Braut (Sie zieht ihren Dolch aus dem
Gürtel) mit diesem Kuß empfangen.
Ich bin noch Eins, noch Siegfriids treues Weib,
Das Eine — Menschliche — das will ich bleiben.

勇気だ、と私は言おう、私の魂よ、しっかりするのだ！
お前はまだ力を必要とする。というのも、喜ばしげに

Der Erde langes Unglück ist gerochen.
Die Völkergeißel hat der Herr zerbrochen;
Erbarmend hat er unser Volk befreit
Von wilder Horden schnöder Dienstbarkeit,
Erlöst vom finstern Heidenthum die Erde:
Nun laßt uns handeln, daß es besser werde.

地上の長い不幸は滅びてしまった。
民族の災いを主人たる神が壊してくださったのだ。
あわれみながら主は我々の民族を
野蛮な遊牧民の卑劣な圧制から解放してくださり、
この世を陰気な異教徒から解放してくださったのだ。
さあ、よりよい世界となるように、行動することにしよう。

この作品を理解するためには最も重要な言葉であり、このディートリヒの言葉によってラウパッハの戯曲は、すべてが悲観主義的な結末に終わる『ニーベルンゲンの歌』の悲劇的世界とは著しく異なるものであることが理解されよう。ラウパッハの戯曲は破滅ののちに新しい世界が生まれることを最終場面において表現しているのであり、ここに中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とは異なって近代的な意味があると言ってもよいであろう。

おわりに

以上のように見てくると、ラウパッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』は、序幕において16世紀の韻文『不死身のザイフリート』や北欧の伝承『歌謡エッタ』および『ヴォルスンガ・サガ』を一部素材として使用しているが、全体のあらすじの展開には主な素材として『ニーベルンゲンの歌』が用いられていることが明らかである。ラウパッハはおおむねその中世英雄叙事詩の展開に従って戯曲化を試みているが、しかし、至るところに改作が施されてラウパッハ独自のニーベルンゲン世界が展開されていることも明白である。その素材との比較においてラウパッハの戯曲の改作点と特徴は、次のように五つにまとめられよう。

まず第一の改作点は、何と言ってもニーベルンゲンの財宝の取り扱い方である。素材の『ニーベルンゲンの歌』ではニーベルンゲンの財宝は作品の奥底に

隠れたままの状態では英雄たちの運命に作用を及ぼしていたのに対して、ラウパッハの戯曲では、表題からも連想されるように、ニーベルンゲンの財宝が表面に現れて、あらすじの展開に直接的に関与している。しかもその財宝は序幕からすでに重要な役割を演じ、韻文『不死身のサイフリート』において主人公が財宝を放棄するのとはまったく逆に、この戯曲ではジークフリートは財宝を執拗に欲しがり、侏儒オイゲルの警告にもかかわらずそれを所有し、クリームヒルトに贈ったために、やがてそれが直接両王妃の口論のきっかけともなり、ついにはハーゲンによる暗殺のきっかけともなるのである。ジークフリート暗殺後における悲劇も、同様にニーベルンゲンの財宝に基づくものであり、ラウパッハの戯曲の特質はまずはこの財宝がクローズアップされているところにあると言えよう。

ラウパッハの第二の改作点は、ブルンヒルトに重要な役割を演じさせていることである。『ニーベルンゲンの歌』ではプリュンヒルトはジークフリート暗殺のきっかけを作るために登場していたに過ぎなかったのに対して、この戯曲ではブルンヒルトは作品全体にわたって登場している。ブルンヒルトはジークフリート暗殺の相談の場にも、また狩り場にも姿を現しているのみならず、エッツェル王がクリームヒルトに求婚してきた折りにも居合わせており、クリームヒルトがひざまずいて同じ女性としての同情を求めてきたときには、かつて自分が罵られた「二人の夫の妻」という言葉をクリームヒルトに言い返すのである。さらにブルンヒルトは最後の戦いの場にも登場し、作品全体を通じてクリームヒルトと口論を展開していくのである。

このようにブルンヒルトから「二人の夫の妻」という罵りを受けたことによって、クリームヒルトはエッツェル王の妻になることを決意する。彼女は『ニーベルンゲンの歌』においてのように愛しい夫のために復讐するというよりは、むしろ自分に浴びせかけられた屈辱的な言葉に対してブルンヒルトに仕返しをしようとするのである。このクリームヒルトの自らの恥辱に対する復讐にラウパッハの第三の特徴があると言えよう。

ラウパッハの第四の特徴は、フン族の国王としてのエッツェル像の改作にある。『ニーベルンゲンの歌』ではエッツェル王はとても温和な人物として描かれていたのに対して、このラウパッハの戯曲では血に飢えた野蛮人で、財宝欲の強い異教徒として登場している。ブルグント族とフン族の間で繰り広げられる戦いも最終段階となったときに、客殿に火を放つのも『ニーベルンゲンの歌』ではクリエムヒルトであったのに対して、この戯曲ではエッツェル王である。またハーゲンが財宝のありかを白状しない態度を見せると、グンター王を殺害

させるのもエッツェル王であり、そのあとハーゲンを殺害させるのも彼である。このような野蛮な異教徒のエッツェル王をクリームヒルトが短刀で突き刺して殺してしまうが、同様にクリームヒルトも野蛮なフン族によって切り倒されてしまうのである。この戯曲ではフン族の取り扱い方が『ニーベルンゲンの歌』とは著しく異なっていることが容易に理解できよう。

この野蛮で異教徒のフン族と対照的に理想的な人物として登場しているのがディートリヒとリュウディガーである。ディートリヒはクリームヒルトに飛びかかったフン族を追い払い、彼らに武器を捨てさせるのである。彼は野蛮な異教徒のエッツェル王の死を天罰だと見なし、それによってこの世が陰險な異教徒の世界から救済されたと考えている。彼はリュウディガーとともにこの戯曲ではよりよい時代の到来を予告する言葉を口にしており、『ニーベルンゲンの歌』の悲劇的な結末とはまた異なった世界を展開させている。まさにこの新しい時代の到来を期待させながら最終幕が降りているところにラウパッハの第五の特徴があると言えよう。

このようにラウパッハの戯曲は、大筋では『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開を示しながらも、ところどころで施された改作によってラウパッハ独自の作品世界を作り出しているのである。この作品はヘッベルが観劇した——ちなみに、ワーグナーも観劇した——ということによって文学史的に意味あるものとなった。ヘッベルはのちに妻となるクリスティーネがこの戯曲に登場したことがきっかけとなって、やがて自らの戯曲『ニーベルンゲン』三部作を書き上げるのである。しかもラウパッハの最終場面はヘッベルによって受け継がれ、ラウパッハとはまた異なったヘッベル特有の世界が描かれることになるのである。そういう意味でもこのラウパッハの戯曲はニーベルンゲン伝説の受容史においては重要な役割を果たしている貴重な作品であると言えるのである。